

人を、世界を救う

赤十字と小澤武雄

戦争や大災害、苦難の病から人を、社
会を守り救う。赤十字の活動は幅広く、
使命は重い。そんな組織がこの国にも生
まれたのは明治10年（1877）西南戦
争の時。発足の一助となり、その後の赤十
字発展に尽くした一人に、北九州出身・

元小倉藩士小澤武雄（1844〜192
6）がいた。

日本赤十字の前身は博愛社

不平士族による最大の反乱西南戦争。
政府軍、薩摩軍双方で死傷者が激増し中

でも薩摩軍の死傷者はその場に放置され
る悲惨な状況。日本のウィーン万博出典
準備のため出向いた欧州で赤十字活動を
知る佐野常民（佐賀藩出身）はこれを聞き、
華族・松平家代表の大給恒ととも死傷
者を救護する博愛社創設を政府に願
た。しかし政府は消極的。ここで当時、
陸軍大佐で征討総督本営参謀だった小澤
は参軍（総司令）山縣有朋とともに佐野
らの訴えに同調、博愛社創設に助力した。
我が国で初の戦時救護組織。同社統計では、
西南戦争での官軍死傷者1万6195人、
薩摩軍は総勢約4万人中死傷者1万50
00人以上だったとする。



小澤武雄 提供：日本赤十字社

博愛社の敵味方の区別なく負傷者を救
護するという人道的な主張は、当時は理
解し難いものだったが、負傷兵士を救うこ
とは結果として国家の恩に報いることにな
るという主張が次第に理解を得、やがて
明治19年（1886）、国は、その原則
を主張する赤十字条約（ジュネーブ条約）
に加盟。これを受け博愛社は翌年5月、

両国が共に人員救護に努めたことに賛辞
を表し、日本に対しては病院、病院船で
看護婦に務めてもらったことも好評を博
したという。
小澤は今の北九州市小倉北区足立で出
生、少年時、小倉藩校思永館で学び、幕
末は長州と幕府の馬関戦争で長州に追わ
れて小倉藩が小倉城を自焼し香春に移る
のを体験した。自叙傳で「このような境
遇にありながら、予が雑事に心奪われる
ことなく、常に全心力を専ら君国の務に
尽くすことが出来たのは、まことに母氏
の努力の賜物である」と記していた。日
本赤十字社にはまた小澤と同時代に、文
人で歴史家、政治家でもあった行橋出身
の末松謙澄も常議員として参画していた。
小澤との交友の程度は不明だが、同じ小
倉藩人として、かつ、赤十字人として協

日本赤十字社に改称し、万国赤十字に加
わった。初代社長佐野常民。小澤も常議
員20人の1人として当初から参画した。
小澤は傍ら陸軍では中將まで進んで参
謀本部長の重責も担い、明治23年（18
90）には貴族院議員となって陸軍は予
備役となり、明治35年（1902）、日
本赤十字社副社長に就任した（大正6年
まで15年間）。その翌々の明治37年（1
904）2月に起きたのが日露戦争。小
澤は臨時救護部長として救護活動の総指
揮を取った。その活動とは中国、朝鮮半
島の前線へ病院船、救護員を派遣、国内
外での臨時の陸海軍病院設営、捕虜の処
遇など多岐にわたる。翌年9月の終戦ま
で派遣した救護員は152班、5170
人にのぼった。戦傷病者は約64万人、う
ちロシア兵捕虜約3万人。5900人は
日本国内で救護した。
この戦争末期の明治38年1月、日本赤
十字は中国・旅順に籠城していたロシアの
戦傷病者、衛生部員に救助の物品を贈り、

小澤自身も同3月に戦場に出張して慰問
するなどし、ロシア赤十字社理事長の将
軍からは感謝の礼状などが贈られ、敵味
方のないその活動に世界各地から「赤十
字本来の姿、役割を果たした」と称賛の

声が上がった。小澤は後年、「赤十字は元
来、戦時の傷病者救護を目的とするもの
だが、戦争の惨害を軽減したいという理想
の究極は、その惨害を全く無くするにある。
その途は戦争を起こらぬようにするしかな
い」（「小澤男爵講話百題」より）と述べ
ている。同書ではまた赤十字の事業につい
て「崇高にして絶大。斯業の為に盡すのは
一面国の為に、一面は又人類の為に盡すも
のである。されば何人にせよ国家の一員た
り人類の一人たる以上は其の義務として斯
業に盡すべき」と主張する。

世界より日本赤十字社称賛

明治40年（1907）、ロンドンでの第
8回万国赤十字総会に小澤が出席。日赤
の日露戦争時における対応が諸国から評
価され、副議長に選任された。また日露



負傷したロシア兵捕虜の治療にあたる赤十字救護班
（佐世保） 提供：日本赤十字社

調していたと考えられる。

その小澤について知る人は少ない。郷土
史家でもある小倉東高校長小正路淑泰さ
ん（60）（行橋市）は「長州との戦いに敗
れた小倉藩の小澤には、西南戦争で敗れ
た西郷軍への思いがあり、敗者にも救援の
手を差し伸べる博愛社に引き付けられた
のでは」と言う。その小澤について「地元
北九州でほとんど無名なのは語る人がいな
かったから。残念。これから現代人が語
り継いでいくしかない」と訴えている。

シニアスタッフ 村田和夫

今回の歴史文化塾は感染予防の
ため中止致します。